

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第724号] 2022年10月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.724

October 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

ふたたび、交友の喜びを

大村 恵美子 (主宰者)

コロナ禍が蔓延して以来、私達の日常生活の中で変わってきた点は、何よりも知人・友達との接触機会の激減でしょう。

ずっと昔だったら、家の構造も違って、縁側の長い廊下が庭に面しているような住居も多くありました。「奥さん、居ます？」とかのかけ声がすると、座敷から顔を出して、その廊下にすわりこんで、ひとしきりおしゃべりが始まる——そういう日々でした。

今では、建物の構造から大きく変わって、そんなに気安く他人の住居に入りこめない。子ども同士でも、まず電話をかけてから、「じゃあ、〇時ごろ行くからね」と予約をとりかわして、やっと対面となる。このほうが、お互いに、いきなり接するよりも、安全で、安心して話をかわすことが出来ます。なんか世知辛いような、寂しいような気もしますが、たとえば、全然知らない人が現れるということもないから、あらかじめ心の準備も出来るのです。

ところで、現状といえば、仲よしの間柄でも、そんなに以前ほどには寄ることもなく、コロナの重荷に、じっとわが家にこもって耐えている、という気持ちの人々が多いのではないのでしょうか。

私も同じで、親しい家族ごとの友達と、久しぶりに昼食などにレストランで一緒になると、以前のような

たのしさを味わいます。交友は、いろいろなあり方があるので、仕方ありませんが、何とか、以前のように、自然で安心してつきあえるような日々が、回復出来たら、という思いが、つるこの頃です。

子供たちも、外でにぎやかに遊ぶ姿などほとんど見ることがなく、都会での交友は、こんなになっただけでは、寂しいような気がするの、私だけでしょうか。

大谷選手の祖国・日本には どこの国も攻撃してこない

さいわいなことに、わが国のメジャーリーガー・大谷翔平選手は、健康にも恵まれ、気立ても優しそうで、まわりのみんなに愛されながら、順調に世界一の活躍を続けています。

野球のさかんな国の住民の多くが、テレビの前で、投手・大谷のあげる三振を、手に汗にぎりながら見つめているでしょうし、新聞のスポーツ欄を読んでは、打者・大谷のホームラン数に毎朝、歓喜していることでしょう。国籍を問わず地球上の多くの人びとが、毎日、世にも稀な二刀流の選手の活躍に、爽快な幸福感を味わわせてもらっています。

こんなに素晴らしい選手に酔いしれている世界の人たちは、わが国が他国に害を及ぼさない方針を守りつづけているかぎり、出身国の日本に向かって、理不尽な攻撃を仕向けるなど、きっとそこに住む国民が許さないでしょう。私たちは、かくも強力な抑止装置に恵まれているのです。これこそ理想的なスポーツと政治のあり方だと思いませんか？

卓越した選手の出現によって、私たちは、敵・味方二分法を離れ、どの国にもまったく等しい成功を期待することができるようになります。

芸術や科学への貢献も然り。このことは、とくに政治家の方々に肝に銘じて欲しいことなので、はっきりと自覚して臨んでください。

(大村恵美子)



■千葉写真館新作展
「デルフィニウム」
[2022/8/16 千葉光雄]

月報 2022年10月号 CONTENTS

- ・次回公演曲紹介：昇天祭への道程 (大村健二) …p. 2~3
- ・第122回定期演奏会 予告…p. 3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [20] (大野博人) …p. 4

バッハ・カンタータの場 景 № 12

大村 健二 (団員)

昇天祭への道程

——受難と復活の予告から、天への別れまで

【第 122 回定期演奏会の曲目】

連載前回 (8 月号) では、「出版計画の現在地」として、10 年後完結を目ざして準備を進めている「大村恵美子訳詞『バッハカンタータ楽譜全集』(全 192 曲予定、既刊 82 曲)」のこと、その第 1 年次刊行予定の 12 曲、中から次回定期演奏会の曲目が選曲されたことなどに触れました。今回は、選ばれたその 3 曲の紹介に進みます。

第 122 回定期演奏会 (2023 年 5 月 6 日、川口リリア音楽ホール、次頁囲み参照) の曲目は、次のとおりです。

■カンタータ第 12 番《泣き 歎き 憂い 迷い》BWV 12

■カンタータ第 22 番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》BWV 22

■昇天節オラトリオ (カンタータ第 11 番《頌めよ 神のみ国》) BWV 11

BWV 番号の若い作品が並んだ事情は、前回に触れたとおり、原則として未刊曲を BWV の順に一括するという方針とした結果によります。そのうち、上掲の 3 曲は、来年 5 月公演をめざして先行出版され、すでに団員のみなさんのお手許に渡って練習が始まっています。

さてこの 3 曲、当合唱団としてはいずれも再演、または三演・四演となりますが、遠い昔のことでした。記録によると、BWV 12 は 1986 年、BWV 22 は 1985 年、BWV 11 は 1978 年が上演の最後、どれも 40 年前後が経過していて、現役の経験者は各パートに 1 人、2 人いるかどうか。ほぼ全員が初見からのスタートとなりました。

当公演のプログラムを、試みに「昇天祭への道程——受難と復活の予告から、天への別れまで」とでも纏めてみました。バッハが作曲にあたり、曲の用途として念頭においた教会暦と当日の福音書章句は、それぞれ以下のとおりです。ステージでの上演順に並べておきます。

○BWV 12……復活節後第 3 日曜日、ヨハネ 16, 16-23 (イエスの別れの言葉「悲しみが喜びに変わる」)

○BWV 22……復活節前第 7 日曜日、ルカ 18, 31-43 (エルサレムへ、受難の予告、弟子たちの無理解)

○BWV 11……昇天節 (復活から 40 日目)、マルコ 16, 14-20 (宣教への派遣、昇天)、使徒行伝 1, 1-11 (白衣の二人が主の再臨を告げる)



■ジョット「キリストの昇天」(14 世紀、イタリア・パドヴァ) . 二人の天使が、弟子たちに「ガリラヤのなれら 何ゆえ天を仰ぐや……」(BWV 11 第 7a 曲) と語っている。

見出しとして掲げたように、イエスの出来事としてみれば、エルサレムに向かう決意を固め、弟子たちとともに都への歩みを進める途上、なんだか自身の受難と復活を予告しますが、当ステージの 2 曲目、BWV 22 《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》の物語もその一つで、時の経過としては初めに置かれることとなります。イエスは「やがて殺されるが、3 日目に甦る」と語る。弟子らにはその意味がわからないのです。教会暦では、復活祭前の第 7 週 (四旬節=レントの直前) と定められています。

さてイエスの一行は、群衆の熱烈な歓迎を受けながら都エルサレムに入城します。ある日 (ヨハネ伝では受難の前日の木曜日)、夕食のときに、イエスはみずから弟子たちの足を洗った、とありますが、その席で語られたイエスの告別の言葉「悲しみが喜びに変わる」を主題として作曲されたのが、ステージでは開幕に置かれる BWV 12 《泣き 歎き 憂い 迷い》です。

かくしてイエスは十字架に死に、予言どおり 3 日目に復活して、悲嘆にくれる弟子たちのまえに顕われました。この後 40 日のあいだ地上に留まって弟子たちを勇気づけてから、彼らをオリブ山につれてゆき、両手をあげて祝福し、弟子たちの見上げるなかを天に挙げられたのです (上掲の挿画)。彼らは「喜びに満ちて」エルサレムに戻り、「たえず神殿の境内にいて、神をほめ讃えていた」とルカ伝の巻末に書かれています。「昇天節オラトリオ」BWV 11 《頌めよ 神のみ国》は、その喜びの合唱によって導かれます。

因みに、2023 年公演の年の教会暦は、復活祭 4 月 9 日、昇天祭 5 月 18 日。まさに渦中の公演 (5/6) です。この一連のストーリーを前提に味わってみれば、選曲の創意の妙に驚くのですが、各曲の成立の背景や時期の多彩さも、また際立ちます。初演の時期と場所、事情、バッハの満年齢を並べてみました。

<次回公演予告>

●第122回定期演奏会

[日時] 2023年5月6日(土) 14:00 開演

[会場] 川口リリア音楽ホール

カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》
カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》
昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》

光野孝子(S)、谷地岬晶子(A)、鳥海寮(T)、小藤洋平(B)
管弦楽: A R S (コレギウム・アルモニア・スペリオレ・ジ・ヤパン)
オルガン: 田尻明葉、合唱: 東京バッハ合唱団
指揮: 大村恵美子

チケット発売: 2023年1月
(チケット情報等の詳細は、本年末に公表します)

○BWV 12……初演 1714年4月(ヴァイマル)、ヴァイマル宮廷の楽師長昇進後の第2作目。バッハ29歳。

○BWV 22……初演 1723年2月(ケーテン~ライプツィヒ)、トーマス・カントル採用試験への提出曲。バッハ37歳。

○BWV 11……初演 1735年5月(ライプツィヒ第2期)、カンタータ創作がまばらになって教会外の活動が増す時期、「クリスマス・オラトリオ」全6部の成立と同年度。バッハ50歳。

シンフォニアに始まり、中間に3曲のアリアが並ぶといった、ヴァイマル・カンタータの特徴を備えたBWV 12。つづくBWV 22で当世風な舞曲のリズムと優美さが目立つのは、ケーテン宮廷の名残か。

またライプツィヒ時代第2期の「昇天節オラトリオ」BWV 11は、「クリスマス・オラトリオ」同様、複数の世俗作品の部分を教会用に改編したものを主部としますが、後世のわれわれはその転用のおかげで、バッハの卓越した祝祭音楽に接することができたのです。

さらに十数年ののち、晩年のバッハが残した至宝《ロ短調ミサ曲》に、このオラトリオ中のアリア(BWV 11、第4曲)がアルトの名曲「アニュス・デイ(神の子羊)」として現れ、さらにはBWV 12、第2曲合唱の音楽が、あのラメント・バス(嘆きの低音)の代名詞ともなる「クルチフィクス(十字架につけられ)」として甦ったことを加えると、この日のプログラムには、バッハの青年期から晩年の円熟にいたる音楽生涯のすべてが盛り込まれた、と言っても許されましようか。

当日のプログラムは、オーボエ・ソロの悲痛な旋律によって開幕し、トランペット3本とティンパニを擁する大オーケストラの歓喜のフィナーレに至ります。来たる2023年、合唱団が新たな周年、新たなステージに踏み出すファンファーレともなるはずのコンサートです。

以下に、各カンタータを個別に、スペースのかぎりで見せておきます。BWV 22とBWV 11は、次の機会。

■カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》

Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen BWV 12

[教会暦] 復活節後・第3日曜日 (Jubilte. 他にBWV 103、146)

[使徒書] Iペテ2, 11-20(神のしもべの義務、召使たちへの勧め)

[福音書] ヨハネ16, 16-23(イエスの別れの言葉、悲しみが喜びに変わる)

[成立] 初演1714年4月22日(上記教会暦)、ヴァイマル。(再演: 1724年4月30日、ト短調稿)

[歌詞] S. フランク台本(?)。3) 使徒言行録14, 22。7) ローディガスト<神の御業こそことごと善けれ> Samuel Rodigast "Was Gott tut, das ist wohlgetan" (1674) 第6節、[BCH-135] (大村著「バッハコラール・ハンドブック」)

[上演用訳詞] 大村恵美子 <http://bachsmusikstarfree.jp/bwv012.htm>

[編成] 独唱ATB、合唱、トランペット、オーボエ、弦合奏(ヴィオラ2部)、通奏低音

[楽曲構成]	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成(略語)/調 ob, vn2, va2, bc へ短調
1. シンフォニア		へ短調
2. 合唱	Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen 泣き 歎き 憂い 迷い	str, bc へ短調 BWV232/17に転用
3. レチタティーヴォ(A)	Wir müssen durch viel Trübsal あまたの災い われらをみ国に導きゆかん	str, bc
4. アリア(A)	Kreuz und Krone sind verbunden, 苦しみ 栄えは	ob, bc ハ短調
5. アリア(B)	Ich folge Christo nach 主に 従わん	vn2, bc 変ホ長調
6. アリア(T)	Sei getreu, alle Pein 主を 頼(た)め	tp, bc ト短調
7. コラール(合唱)	Was Gott tut, das ist wohlgetan 神のみわざこそ ことごと善けれ	tp, ob, str, bc 変ロ長調

(演奏時間 25分)

[上演履歴] 1967 (#12)、1980 (#47)、1986 (#60)、2023 (#122) 予定

[日本語版楽譜発行] 2022年、ISBN 978-4-925234-90-0 (¥1500)

イエスが、目前に迫りくる受難と復活を予告して弟子たちに語ったことば「あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる」(ヨハネ16, 20)を、みごとに音楽へと結晶化したバッハの青年期の作品の一つ(1714年4月、ヴァイマル)。歌詞作者は、当地宮廷の聖職会議書記、ザーロモ・フランクとされ、去る5月の60周年記念公演(杉並公会堂)でBWV 21《われは憂いに沈みぬ》(1713年10月初演?)を経験した方々は、発想の近さを感じるかも知れません。

場景としては、洗足木曜日(受難の金曜日の前日)の食卓を想い描いてください。「しばらくすると、わたしを見なくなるが、またしばらくすると、見るようになる」というイエスの謎のような言葉に、弟子たちは不安にかられている。この不安から希望へ、苦しみから喜びへの転換が、曲全体をとおして実現されていくのを見届けていただきたいと思います。

第2曲の合唱では、〈泣き 歎き 憂い 迷い〉の重い半音階下降のシャコンヌ(3拍子)による苦悩の表出が、〈悩むもみな 日々の糧なり〉の結論へと至るのですが、ここで急にテンポを速めて〈イエスのみ跡をたどる われらには〉と、その根拠が語られます。

この転換の構造を、つづく第3曲、アルトのレチタティーヴォから、3曲連続のアリアの展開がなぞりま。第4曲アルト〈苦しみ 栄えは一つに結ばる〉(ハ短調)→第5曲バス〈主に従わん〉(喜びへの転換、変ホ長調)→第6曲テノール〈主を頼め〉(トランペットが“Jesu meine Freude「イエスよ わが喜び」”の旋律を奏でる、ト短調)。終結コラール(第7曲)における絶対の肯定〈ことごと善けれ〉へと至ります。

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

<連載随想> 退屈するのはいそがしい [20]

森のターフェルムジーク

安曇野閑人 大野 博人

安曇野に秋の気配がただよいはじめたころ、近くの森の中のレストランで晩ごはんを食べた。

その森にはカフェやレストランが点在している。自家製のパテやリエットを作っている小さな惣菜店もある。シェフは日本人の女性だけれど、フランスで5年も修行していて、本場のコンテストで勝ち抜いた経験もある本格派。石窯で焼いているフランス風のパン屋もある。店は山を少し上がったところにあり、朝の散歩がてらに立ち寄るには少々きつい。客はつつい車を使う。だから「自転車で来たお客様」には「1割引き」なんてご褒美が用意されている。

東京の表参道や代官山あたりを、しゃれた店だけ残して残りをぜんぶ雑木林にしてしまったら、ここみたいにになるんじゃないかしら、と思う。ホントに。

訪れたレストランも森の中の一軒。日が落ちてすっかり暗くなっていたけれど、途中にはネオンはもちろん街灯もない。茂った木々の葉が道路にはみ出し車に触れる。すれ違う車もほとんどない。

入ってみると、明るい店内にキース・ジャレットのピアノが静かに流れていた。いまだきめずらしいLPレコードだ。それに虫の声がかさなる。窓は網戸。よく聞こえる。すぐ外が森だけのことはある。

そう言うと、「それだけじゃないんです」と若いシェフ。「どうやら数日前から、キッチンのどこかにもスズムシがいるみたいなんです。居心地がいいんですかね」

都会の喧噪からは遠く離れていても、森は静まりかえっているわけではない。さまざまな音が聞こえる。

鳥の声はもちろん、虫も季節ごとにちがう歌手が舞台上に登場する。夕暮れ時のほとんど決まった時刻にヒグラシが鳴き出すと、まもなく夏。盛夏になればアブラゼミをはじめとするセミ時雨が続く。それがディミヌエンドし始めるころ、引き継ぐように秋の虫たちのパートがクレッシェンドしていく。

森の音は鳥や虫だけではない。植物も音を立てる。



■森の中のフランス風お惣菜屋さん並ぶパテやリエット

雨あがり、陽光がもどってきているのに雑木林からパラパラと雨音が続く。雨水を残していた木々の葉が風に吹かれて、いっせいに水滴を落とす音だ。森の雨は、すこし遅れてやむ。

風が立つのもすぐにわかる。木々の間を通り抜けるとき、葉をいっせいにふるわせてさわさわという音になる。風が強いと雑木林全体がざわざわと鳴る。森はささやいたり、ざわめいたり。

夏の夕立は、たたきつけるような雨とともに雷鳴もすさまじい。冬は、多少の音も積もった雪に吸い込まれ、しーんとしている。でも、少し気温が上がると、木々の枝や葉が宿していた雪がかたまりになって落ちる。急に雪煙を上げながらドサッ、バサッと大きな音を立てるので驚かされる。



■朝ごはんは雑木林の中で(両写真・説明とも筆者)

春から秋にかけて、朝食は雑木林のわきの庭先に出したテーブルで取ることにしている。すわると、鳥や虫や木々がターフェルムジークを奏でてくれる。

ジュースとコーヒー、パンという何の変哲もないメニューだけれど、気分は、バッハのブランデンブルク協奏曲を聴きながらごちそうを楽しむ王侯貴族。なんという贅沢な時間。

家の中にいるときも、窓を開けたままにしていると、森の音があちこちから聞こえてくる。南の草むらから聞こえてきたコオロギの声にこたえるように、北側からマツムシやウマオイが鳴き始める。

9月も半ばをすぎると、日が暮れてから気温もぐつと下がる。けれど、森の音楽を聞きたくて窓を閉めるのを少しためらう。

夜、風呂に入って窓をあけた。すだく虫の声。いい湯だった。(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

[編集後記]

- ・上掲随筆は、めでたく連載第20回を迎えました。毎月20日、日付が変わらないうちに原稿が届きます。この定期便の到着を合図に、入稿に向けて最終整理が始まります。毎月欠かさず発行できているのも閑人氏のお蔭、心より感謝しています。
- ・さて今回の話題中、「リエット」を初めて知りました。パテとの区別がつきませんが、近いうちに試してみます。
- ・毎回どこかにバッハの曲名が登場したり(当月報へのお心づかい…)、音楽の話題が豊富なのも楽しみの一つ。それもそのはず、閑人氏、実は森のセロ弾きです。(K)